ススキノの思い出

小倉　一純

札幌で大学時代を過ごした。学生だったが、ススキノを訪れることもあった。もう四十年以上も前の話である。

ススキノは明治以降、北海道開拓のため、内地（本州以南のこと）から渡ってきた男たちが羽を伸ばす目的でつくられた、遊郭のあった場所である。当時の写真を見ると、ススキの生えた野原の真中の、黒板塀で囲まれた所に、木造総二階建ての遊郭の建物があった。

昭和三十年代以降、ススキノは住宅街へと変貌し始めていた。それが、昭和四十七年の冬季オリンピックを契機に観光客も増えつづけ、札幌は日本の観光地の代名詞ともなっていく。そんな追い風を受けながら、ススキノはやがて北日本随一の歓楽街へと発展した。

ススキノは、学生当時、「女性の一人歩きも安心な街」というのが売りであった。

一軒目の安いバーを出たところだった。友

人が連れ立って公衆トイレへ行ったので、僕はひとり舗道に佇んでいた。

そこへ、丸刈りで作務衣のような服装の男がものすごい形相でこちらへ向かってくる。

全力疾走の裸の足が地面を打つ足音がビルの谷間に響く。右手には、抜き身の日本刀を垂直に振りかざしている。あッ！

男は、僕の横をすり抜けるようにして行き過ぎ、幌がかかった階段を二階へ駆け上がり、あっという間に建物の中に姿を消した。翌日の新聞は何も伝えていなかった。